

実践報告

## 看護教員の男子学生に対する ジェンダー意識と講義への配慮

北崎 直美・北 みゆき\*・酒井 桂子\*\*・北浜 まさみ\*\*\*・佐藤 禮子\*\*\*  
澤井 秀子\*\*\*\*・能戸 昭子\*\*\*\*・林 みどり\*\*\*\*\*・北岡（東口）和代\*\*\*\*\*

石川県立総合看護専門学校 浅ノ川学園金沢看護専門学校\*  
金沢医科大学附属看護専門学校\*\* 元浅ノ川学園金沢看護専門学校\*\*\*  
石川県立田鶴浜高等学校専攻科\*\*\*\* 石川県立看護大学\*\*\*\*\*

Nursing teachers' awareness of male students' gender  
and educational considerations in lectures

Naomi Kitazaki, Miyuki Kita\*, Keiko Sakai\*\*, Masami Kitahama\*\*\*  
Reiko Satoh\*\*\*, Hideko Sawai\*\*\*\*, Akiko Noto\*\*\*\*\*  
Midori Hayashi\*\*\*\*\* and Kazuyo Kitaoka\*\*\*\*\*

Ishikawa Prefectural School of Nursing  
Medical Institute of Nursing Kanazawa\*  
Kanazawa Medical University Nursing School\*\*  
Former Medical Institute of Nursing Kanazawa\*\*\*  
Nursing School of College, Tatsuruhama High School\*\*\*\*  
Ishikawa Prefectural Nursing University\*\*\*\*\*

### キーワード

男子学生, 看護教育, 看護教員, ジェンダー, 配慮

### はじめに

看護教育の場ではまだ少数派である男子学生について、これまで様々な研究が報告されている。その多くは母性看護学実習での取り組み<sup>1)</sup>や男子学生を調査対象とした報告<sup>2)</sup>である。合田ら<sup>3)</sup>は男子学生を受け入れるため教育設備の充実等だけでなく、教育者の意識改革や教育内容の見直しや工夫の必要性を述べている。石川県看護教育機関連絡協議会でも今後の男子看護学生への教育のあり方を検討する目的で、一県での看護養成機関における男子学生への看護教育現場での配慮の実態を多面的に調査した。その調査結果を第1報から

第3報に分けてまとめた。

第1報は、管理・臨地実習現場における実習調整についての実態で、次の点を報告している。①調査した養成機関すべてが男子学生を受け入れている。②増加する男子学生に対し、施設整備面が十分とは言えず、施設整備面を充実させ、教育環境を整えていく必要がある。③男子学生の臨地実習では、教員は実習施設の協力を得ながら、男子学生が様々な体験をできるように、女子学生より多くの配慮をしている。

第2報は、学内演習および臨地実習における看護技術を教育する際の配慮についての実態で、次

の点を報告している。①学内演習では、男子学生が看護技術を実施する際、身体接触の程度や患者役の身体露出の程度に応じて、実習ペアを男子学生・男性職員・人形に変えるなどして実施している。②臨地実習では、患者の意向や実習施設側の意向を確認しながら看護技術を実施している。

そして第3報では、これまでほとんど報告のみられなかった看護教員の男子学生に対するジェンダー意識や、講義への配慮についての実態をまとめた。①教員の男子学生に対するジェンダー意識と属性との関連、②講義への配慮、③講義への配慮とジェンダー意識との関連、④講義への配慮をする教員の特徴、以上4点について報告する。

### 用語の定義

ジェンダーとは、特定の社会が男性及び女性にふさわしいと考える社会的に構築された役割、態

度、行動、属性を指す（WHOの定義）。

### 研究方法

#### 1. 対象

一県内全13看護師養成機関の課程ごとの管理者16名、課程ごとに基礎、地域、在宅、成人、老人、小児、母性、精神の8領域を担当する教員122名、計138名を対象とした。なお、管理者とは、学校長・副校長・学部長・教務主任であり、領域担当者は、各8領域を担当する専任教員である。

#### 2. 調査方法

調査実施期間は2005年9～10月である。独自に作成した無記名の自己記入式調査票を一括して各養成機関に配布し、個別の返信用封筒にて郵便での返送を依頼した。調査目的等を各養成機関課程代表者宛に別途文書によって説明し、研究への協力を依頼した。

表1 意識調査項目と分類

男子学生へのジェンダー意識	男子学生は指導力がある 男子学生は冷静である 男子学生は体力がある 男子学生は機械に強い 男子学生は論理的である 男子学生は自己決定ができる 男子学生は自分の意見を主張する 男子学生は気持ちが細やかである* 男子学生は従順である* 男子学生は感情的である* 男子学生は思いやりがある*
男性看護師への考え方	男性看護師の活躍の場が増加すればよい 男性看護師の人数が増加すればよい 男性看護師の管理職者が増加すればよい 男性看護師も女性患者を担当すればよい 自分が入院した場合男性看護師が担当してもよい
男子学生への教育方法の考え方	男子学生の対応は男性教員の方がよい 男子学生に応じた教育プログラムがあるとよい 男子学生が男性看護師と共に学習できる場面があるとよい 男性教員の数が増加すればよい
男子学生に対する意識	講義の内容によっては、男子学生がいると恥ずかしいと感じる場面がある 学内演習の内容によっては、男子学生がいると恥ずかしいと感じる場面がある 女子学生より男子学生の視線が気になる
看護師イメージ	看護師は専門職である 看護師は高度の行動基準をもっている 看護師は技術者である 看護師は多くの専門的知識を身につけている 看護師は勉強しなくてはならない 看護師はハードな仕事である 看護師はストレスの多い仕事である

\*；逆転項目

### 3. 調査内容

1) 属性項目：年齢，性別，看護職の資格，臨床経験年数，教員経験年数，専門領域である。

2) 意識調査：調査内容は「男子学生へのジェンダー意識（11項目）」「男子学生への教育方法の考え方（4項目）」「男子学生に対する意識（3項目）」「看護師イメージ（7項目）」「男性看護師への考え方（5項目）」の5つに分類した（表1）。このうち，今回の研究では「男子学生へのジェンダー意識」「男子学生への教育方法の考え方」「男子学生に対する意識」について取り上げている。

ジェンダー意識に関連した項目は男性性イメージと女性性イメージ<sup>4)</sup>を抽出し，女性性イメージの項目は逆転項目とした。意識の得点化は，「全くそう思わない」=1点から，「非常にそう思う」=5点の5段階評価とした。

なお，配布した調査用紙には30項目のみ記載し，5つの分類は示されていない。ジェンダー意識を調査する際，各教員が教育者という立場を意識して，本来持っている自己のジェンダー意識と違う回答を故意にしない工夫を，研究者間で話し合った。その結果，質問項目はこれまでの調査研究で用いられている一般的な看護者イメージ<sup>5)</sup>や，男性看護師に対する考え方<sup>6)</sup>なども含め，ジェンダー意識に対する質問に限らないよう配慮した。

3) 講義での配慮：「かなり配慮している」「配慮している」「どちらともいえない」「あまり配慮していない」「配慮していない」より1つ選択する。配慮していると回答した場合，その内容を自由記載してもらった。

### 4. 分析方法

属性の内容，講義での配慮は単純集計を行い，自由回答は類似する内容をまとめた。意識調査については，5つに分類した内容について属性による得点の違いを，それぞれt検定あるいは一元配置分析で比較した。その際，臨床経験年数と教員経験年数については，それぞれの平均値の上下2つに分けた。正規性の検定はシャピローウィルクスの検定を行った。コンピューターソフトはSPSS Ver11を使用した。

### 5. 倫理的配慮

協力を依頼した文書には，データを統計的に処理し調査以外の目的に使用しないこと，調査の結果を公表する場合は匿名性に配慮する旨を明記した。また，各養成機関課程代表者には参加は回答者の自由意思である点を伝えた上で，調査への協

力を口頭で依頼した。

## 結 果

対象の概要：管理者13名，各領域担当者73名，計86名から回答を得られた（回収率62.3%）。平均年齢46.2±6.9歳（管理者群54.6±6.8歳 領域担当者群44.8±5.9歳），臨床経験平均年数10.5±6.0年，教員経験平均年数12.3±7.5年，資格は看護師63名，助産師16名，保健師6名。専門領域は基礎14名，地域/在宅11名，成人/老年25名，小児10名，母性13名，精神10名であった。

性別は管理者が女性12名と男性1名，各領域担当者はすべて女性であった（表2）。回答が得られた各養成機関の男子学生数は，4年課程が18名，3年課程が136名，2年課程が29名，准看護師課程が32名，5年一貫教育が9名であった（表3）。

表2 対象の概要

		n=86	
		人数	(%)
年 齢	30-39歳	13	(15.1)
	40-49歳	47	(54.7)
	50-59歳	19	(22.1)
	60-69歳	4	(4.7)
	無回答	3	(3.5)
性 別	女性	85	(98.8)
	男性	1	(1.2)
資 格	看護師	63	(73.3)
	助産師	9	(0.5)
	看護師+助産師	7	(8.1)
	看護師+保健師	6	(7.0)
	無回答	1	(1.2)
臨床経験	10.5年未満	51	(59.3)
	10.5年以上	30	(34.9)
	無回答	5	(5.8)
教員経験	12.3年未満	42	(48.8)
	12.3年以上	39	(45.3)
	無回答	5	(5.8)
専門領域	基礎看護学	14	(16.3)
	成人/老年看護学	26	(30.2)
	精神看護学	10	(11.6)
	母性/小児看護学	25	(29.1)
	地域/在宅看護学	10	(11.6)
	無回答	1	(1.2)
職 位	管理者	13	(15.1)
	領域担当者	73	(84.9)

### 1. ジェンダー意識と属性との関係

対象は管理者13名と各領域担当者73名，計86名。「男子学生へのジェンダー意識」は，職位では管

表3 課程別各学年の男子学生数

	人数(%)	
	全学年数	男子学生数
4年課程	340	18 (5.3)
3年課程	1229	136 (11.1)
2年課程	166	29 (17.5)
准看護師課程	72	32 (44.4)
5年一貫教育	189	9 (4.8)
全体	1996	224 (11.2)

(%)；総数に対する男子学生数の割合

理者群 (34.7±3.6) が領域担当者群 (32.6±3.2) より、また、年齢では50-59歳 (33.8±2.0) が30-39歳 (31.4±3.6) より有意に高かった ( $p < 0.05$ )。資格 (看護師資格のみ・助産師資格有・保健師資格有) 臨床経験年数 (10.5年以上・10.5年未満)、教員経験年数 (12.3年以上・12.3年未満)、専門領域 (基礎・地域/在宅・成人/老年、小児・母性・精神) に有意差はみられなかった (表4)。

## 2. 講義への配慮

対象は各領域担当者73名。

「配慮している」14名 (19.2%)、「どちらともいえない」22名 (30.1%)、「あまり配慮していない」20名 (27.4%)、「配慮していない」17名 (23.3%)であった。「かなり配慮している」と回答したものはなかった。

自由記載してもらった講義への配慮については、『講義内容の配慮』と『講義方法の配慮』に分けられた。『講義内容の配慮』には「性に対する価値観」などの配慮があり、『講義方法の配慮』には「言葉」「態度」の配慮があった (表5)。

## 3. 講義への配慮とジェンダー意識との関連

講義への配慮をしている群14名、どちらともいえない群22名、配慮していない群37名の3つに分けて比較したが、それぞれ「男子学生へのジェンダー意識」に有意差はなかった (表4)。

## 4. 講義への配慮をしている教員の特徴

配慮している群14名中、母性看護学担当者が5名 (35.7%) と多かった (表6)。また、「男子学生への教育方法の考え方」について、配慮している群 (14.3±1.5) は、どちらともいえない群 (12.5±2.4)、配慮していない群 (12.8±2.1)、各群より有意に高かった ( $p < 0.05$ ,  $p < 0.01$ )。さらに「男子学生に対する意識」についても、配慮している群 (9.3±2.6) は、どちらともいえない群 (7.5±2.5)、配慮していない群 (6.4±1.7)、各群より有意に高かった ( $p < 0.05$ ,  $p < 0.01$ ) (表4)。

## 考 察

管理者が領域担当者より、男子学生に対しジェンダー意識が高い傾向にあった。管理者群と領域担当者群の年代は、有意差のあった50歳代、30歳代とそれぞれ重なる。したがって年齢の違いが要因といえる。白木ら<sup>1)</sup>もその研究の中で「年代が高いほど性差意識が大きいといえる」と報告している。看護教員も各年代の社会的背景が影響し、年齢によってジェンダー意識の違いがみられる結果となった。一方、管理職という立場が影響するか否かは今回の研究では検討できなかった。また、資格の違いや、臨床経験年数の長短、教育経験年数の長短、専門領域の違いとジェンダー意識に関連はなかった。ジェンダーについては主に母性看護学で講義する。したがって母性看護学担当者は他の領域担当者よりジェンダーを認識し、ジェンダー意識が低いと予測されたが、他の領域担当者と変わらないと分かった。

講義を配慮している群、どちらともいえない群、配慮していない群とでは、ジェンダー意識に有意差はみられなかった。講義を配慮している教員は、母性看護学担当者が多く、さらに自由記載をみると講義の内容はセクシュアリティに関連したもので、女性視点に偏らないようにといった配慮がみられる。また男子学生が不快な思いをしないよう言動への配慮もある。しかしそういった配慮をしている教員とそうでない教員との間に、ジェンダー意識の違いはないと分かった。

しかし、講義を配慮している教員は男子学生を意識するなど講義のやり辛さが同え、女性教員が男性視点でのセクシュアリティを話すには限界があるようだ。したがって講義を配慮している教員は、そうでない教員より、男子学生には男性教員や指導者の関わり、男子学生の教育プログラムをとといった教育方法を望んでいる。

近年、女性外来のみならず男性専門外来の開設といった性差医療が進みつつある<sup>8)</sup>。さらに山田<sup>9)</sup>は、女性看護主体であった母性・小児領域を、家族の問題として捉えて、父性に関わる男性看護師の必要性を述べている。講義を配慮している教員は、講義の内容がセクシュアリティに関連したものが多いため、近年の性差医療や“女性性”“男性性”の違いに敏感であるともいえる。講義をしていく中で、男子学生が男性視点でのセクシュアリティを捉え、男性看護師としての役割を認識するためには、男子学生への教育方法の検討が必要

表4 属性別得点

		男子学生へのジェンダー意識			男性看護師への考え方			男子学生への教育方法の考え方			男子学生への意識			看護師イメージ		
		人数	平均	± 標準偏差	平均	± 標準偏差	平均	± 標準偏差	平均	± 標準偏差	平均	± 標準偏差	平均	± 標準偏差		
年齢	30-39歳	13	31.4	± 3.8	}	17.8	± 3.8	13.5	± 2.2	7.4	± 2.4	30.6	± 2.9			
	40-49歳	47	32.8	± 3.3		17.4	± 3.2	12.9	± 2.2	7.2	± 2.5	30.8	± 3.0			
	50-59歳	19	33.8	± 2.0		17.1	± 3.7	12.5	± 2.0	7.2	± 2.2	31.1	± 2.6			
	60-69歳 (欠損値) (3)	4	34.5	± 1.9		17.5	± 2.4	12.5	± 1.7	7.0	± 1.8	29.3	± 1.7			
資格	看護師 (欠損値) (1)	63	33.0	± 3.2	17.1	± 3.2	12.7	± 2.2	7.1	± 2.1	30.7	± 3.0				
	助産師	16	32.4	± 4.1	17.8	± 3.7	13.4	± 1.5	8.4	± 2.9	30.5	± 2.3				
	保健師	6	33.5	± 2.6	19.0	± 2.8	13.5	± 2.4	6.3	± 2.4	32.8	± 3.0				
臨床経験	10.5年未満 (欠損値) (5)	51	32.9	± 3.5	}	18.2	± 3.1	13.1	± 1.9	7.4	± 2.4	30.8	± 2.9			
	10.5年以上	30	32.7	± 2.8		16.3	± 3.4	12.7	± 2.2	7.2	± 2.3	30.6	± 2.9			
教員経験	12.3年未満 (欠損値) (5)	42	32.5	± 2.8	}	17.1	± 3.5	13.1	± 2.0	7.2	± 2.1	31.5	± 2.6			
	12.3年以上	39	33.1	± 3.6		17.8	± 3.2	12.8	± 2.0	7.4	± 2.6	29.9	± 3.0			
専門領域	基礎看護学	14	33.8	± 1.8	18.2	± 3.2	12.6	± 2.3	7.2	± 2.3	30.6	± 3.3				
	地域/在宅看護学	11	34.1	± 4.4	17.4	± 3.4	13.0	± 2.4	6.6	± 2.0	32.2	± 2.1				
	成人/老年看護学	25	32.4	± 3.0	17.0	± 3.3	13.0	± 2.0	7.1	± 2.5	30.4	± 3.3				
	小児看護学	10	32.5	± 2.7	17.2	± 3.3	11.8	± 2.6	6.1	± 1.7	31.1	± 2.8				
	母性看護学	13	32.5	± 4.4	17.2	± 4.0	13.5	± 1.5	8.8	± 2.9	30.2	± 2.3				
	精神看護学 (欠損値) (3)	10	32.8	± 3.9	18.0	± 2.8	13.4	± 1.7	7.2	± 1.5	30.1	± 2.2				
職位	管理者	13	34.7	± 3.6	}	18.8	± 3.1	12.6	± 1.4	7.4	± 2.3	31.1	± 2.8			
	領域担当者	73	32.6	± 3.2		17.2	± 3.3	13.0	± 2.2	7.3	± 2.4	30.7	± 2.9			
講義での配慮	配慮している	14	32.4	± 4.2	}	18.0	± 3.6	14.3	± 1.5	}	9.3	± 2.6	}	31.1	± 2.6	
	どちらともいえない	22	32.9	± 2.0		17.0	± 3.1	12.5	± 2.4		7.5	± 2.5		29.9	± 3.3	
	(あまり) 配慮していない	37	32.4	± 3.4		17.0	± 3.4	12.8	± 2.1		6.4	± 1.7		31.0	± 2.7	
全体		86	32.9	± 3.3	17.5	± 3.3	12.9	± 2.1	7.3	± 2.4	30.77	± 2.9				

\*: p<0.05 \*\*p<0.01

表5 講義への配慮 自由記載の内容

講義内容の配慮	性差の配慮	女性の視点、男性の視点で話をする 性差のない視点で話をする
	性に対する価値観の配慮	偏った性知識に繋がらないよう気をつける 断定した物の言い方をしない 多様な性のあり方について批判しない 教員の意見を押し付けない
	事例の配慮	片寄らないよう、しかしお互いの立場を意識して考えさせる 看護職を女性のみに限定しない
講義方法の配慮	言葉の配慮	セクハラにならないよう言葉に気をつける 性教育では男性を批難するような言動に気をつける 性に関する話をする時、淡々と話すようにしている
	態度の配慮	自尊心を傷つけないように接する 男子が少ないので孤独にならないようにする ジェンダー意識に関する授業で男子に意見を強制して述べさせない
その他		患者様から拒否的な態度を受けることもあると伝えておく 男尊女卑について話をする時困る 性差を配慮することは当然なので配慮していると回答しない

表6 各領域担当者の男子学生に対する講義への配慮

	人数(%)			合計
	配慮している	どちらともいえない	配慮していない	
基礎看護学	1 ( 7.1)	1 ( 4.5)	6 ( 16.2)	8
地域/在宅看護学	2 ( 14.3)	2 ( 9.1)	6 ( 16.2)	10
成人/老年看護学	4 ( 28.6)	10 ( 45.5)	9 ( 24.3)	23
小児看護学	1 ( 7.1)	4 ( 18.2)	4 ( 10.8)	9
母性看護学	5 ( 35.7)	1 ( 4.5)	5 ( 13.5)	11
精神看護学	1 ( 7.1)	2 ( 9.1)	6 ( 16.2)	9
欠測値	0 ( 0)	2 ( 9.1)	1 ( 2.7)	3
合計	14 (100.0)	22 (100.0)	37 (100.0)	73

と考えているのではないだろうか。

今回の研究の限界は、講義への配慮について「性差を配慮することは当然なので配慮していないと回答する」といった記載から、教員により配慮の捉え方に差が生じたところにある。したがって講義への配慮の有無を問うた回答者数が妥当とは言えない。今後は、講義への配慮の内容を具体的に記載し、その実施の有無を明確にする必要がある。さらに男子学生が教員にどういった講義での配慮を望んでいるのか、また、教員の実施している配慮との間に差が生じていないか調査をすすめる、男子学生への教育のあり方を検討していきたい。

## まとめ

一県内の13看護養成機関で看護教員の男子学生に対するジェンダー意識と講義への配慮について実態調査したところ、以下の結果が得られた。

1. 教員の男子学生に対するジェンダー意識は、管理者が高い傾向にあった。その要因に年齢が影響している。

2. 男子学生に対する講義への配慮をしている教員は全体の19.2%であった。

3. 講義への配慮の有無とジェンダー意識との関連はなかった。

4. 講義への配慮をしている教員は母性看護学担当者が多かった。また、講義への配慮をする教員はそうでない教員より男子学生への教育方法について、男性教員や指導者の関わりや男子学生の教育プログラムの必要性を考えていた。同時に講義や実習の内容によってはやり辛さを感じていた。

この研究は(財)いしかわ女性基金の助成を受けて実施した。

## 文 献

- 1) 矢原隆行：看護教育の場におけるジェンダー構築、男子看護学生をめぐる状況、看護教育、42(1)、34-38、2001
- 2) 西田妙子、高田敏恵、北崎直美、他：特集男子学生の現在 男子学生の母性看護学実習、看護教育、42(1)、19-33、2001
- 3) 合田典子、大室律子、西山智春、他：男女共同参画社会における看護教育-男子学生の動向について-、岡山大学医学部保健学科紀要、15(1)、39-49、2004
- 4) 小出寧：男と女の心理テスト-フェミニズム

・ジェンダー・セクシュアリティ-、ナカニシヤ出版、23-33、京都、1998

- 5) 小野寺杜紀、波多野梗子：男子看護学生の看護職に対するイメージ-女子看護学生との比較-、看護教育、36(11)、970-976、1995
- 6) 北林司：看護教育プロジェクトにおける男子学生のジェンダー問題、看護教育、45(12)、2004
- 7) 白木智子、石橋直美、進藤美樹：看護教員を対象とした性差意識・行動の研究-性差意識の実態と性差形成要因との関連-、第29回日本看護学会論文集 看護教育、12-14、1998
- 8) 石蔵文信、西村明子：男性の更年期障害、看護教育、47(8)、709-713、2006
- 9) 山田正己：父性看護学確立への提言、看護学雑誌、66(1)、1018-1021、2001